

平然と嘘をつく政治家

福島 橋下徹さんも安倍さんと共通している面があると思いますが……。

内田 この二人は、出てきた文脈は違っていますが、今の日本の政治文化の中で果たしている機能は非常によく似ていると思います。

二人とも、**幼児的で攻撃的で不寛容**。中学生的基準での「悪い子」なんです。食言をいとわない点もよく似ている。あの人たち、首尾一貫性を維持しなければ自分の知的誠実さが疑われると思っていない。言葉なんか、ただのその場しのぎでいいんだと思っている。

以前、検事をやっている友人から聞いたのですが、前日の供述と今日の供述の矛盾をつくつと、がばつと机に伏せて「申し訳ありません」と自供してしまうのは、だいたい知識人なんですって。教師とか公務員とかは、供述のわずかな矛盾をつくつと、それだけでがらがらと崩れてしまう。でも、やくざなんかは平気らしい。昨日の供述と今日の供述が違うじゃないかと矛盾をつくつと、「そんなこと言いましたか？ じゃあ、訂正しておいてください。今日の話がほんとうです」と平気で言うそうです。供述の矛盾を指摘されたら「おしまい」だなんて思い込んでいるのは、自分のことを知識人だと思っている人間だけなんです。「言った覚えがない」とか、「それはあなたの記憶違いだ」とか、「今言っていることが真実である」とか言い抜ければ、**供述の矛盾なんか実はまったく有罪の証明にはならない**。

自分のことを知識人だと思っている人間は、言ったことについて前後の矛盾を指摘されると、自分の知的威信が崩されたと思ってしまう。そこに自分のアイデンティティがあると思込んでいるから。でも**安倍さんや橋下さんは、別に言うことに首尾一貫性がないと指摘されても痛くもかゆくもない**。

内田 二人を駆動している政治的な情念がある種の「怨念」だという点でしょうね。安倍さんがルサンチマンを抱いている対象というのは、抽象的に言うと「戦後レジーム」ということになる。要するに、大日本帝国の敗戦後に、新規に作られた仕組みの全体が彼にとっては許しがたいものとして見えている。だから、安倍さんは最終的には、東京裁判を否定し、サンフランシスコ講和条約を否定し、日米安保条約も否定することを目指しているんだと思います。つまり、**戦後の対米従属そのものを否定して、大日本帝国と同じような主権国家に作り直さなければならない**と思っている。

戦後レジームというのは、まさに日本が「戦争のできない国」であることを土台にして制度設計されているわけです。このレジームからの脱却が彼の悲願なのですが、「戦争ができないという呪い」を解除できるのは、「日本には二度と戦争をさせない」という呪いをかけた本人であるアメリカだけである。だから、アメリカに呪いを解いてもらうしかない。でも、**アメリカが日本に許してくれる「戦争」は「アメリカがする戦争のお手伝い」だけです**。だから、あらゆるアメリカの戦争に協力できるように法整備しようとしている。特定秘密保護法も、集団的自衛権の行使容認も、安保法制も、すべては「アメリカがする戦争のお手伝い」が円滑にできるように日本の仕組みを書き換えるためのものです。もはやそれだけが国家目標になっている。

福島 安倍さんは改憲を実現しようとしていますが、**自民党改憲草案はすさまじい内容**です。今年（二〇一五年）三月四日、参議院の憲法審査会に水島朝穂さんが参考人として出席して、自民党の改憲草案と中国憲法と

北朝鮮憲法と韓国憲法を比較して、前文が文化、伝統から始まるのはこの四カ国に共通していると指摘しました。

それから、改憲草案一二条と一三条では、**基本的人権を「公益及び公の秩序」によって制限できるとし、国民はつねに「公益及び公の秩序」に従わなければならない**としているでしょ。

アメリカは戦争をすることで経済を回している国ですから、戦争をやめるわけにはゆかない。戦争は続けたいが、アメリカ人兵士の死傷者は出たくない。だから、空爆したり、ドローンで偵察したりして、人的資源の消耗を最小化しようとしている。でも、それにも限界がある。占領地の治安維持やパトロールや検問は地上部隊がいないと話にならない。そういう仕事は民間の軍事会社が請け負っているわけですけど、これがめちゃくちゃな金額を請求してくる。その財政的負荷が耐えがたい。そこに日本が「アメリカの汚れ仕事をうちが肩代わりしようじゃありませんか」と自分から言い出してきた。これはアメリカにしてみたら「渡りに船」です。アメリカの戦費を負担し、アメリカ兵の代わりに自衛隊員が死傷するリスクを負いますと日本のほうから言ってくるんですから、断れる話じゃない。

それに対する日本からの交換条件は「戦後レジームからの脱却」を認めろということ、それだけです。あの戦争は「正しい戦争」だった。中国や韓国にはもう謝罪しない。植民地主義的行為についてももう反省しない。立憲デモクラシーは空洞化する。言論の自由も集会・結社の自由も抑圧する。そういう非民主的な強権的な政体にしたいのだが、それを黙認してくれ、そうアメリカに要求してみたら、思いがけなく、アメリカが「いいよ」と返事をした。アメリカだって、背に腹は替えられない。日本が民主主義の国であろうが、非民主的な国であろうが、アメリカにとって「都合のよい国」でありさえすれば、どっちでもかまわない。

内田 もう先行きはどうかだっていいですよ。日本経済を長期的に考えたら、正規雇用の拡大と健全な中産階級の育成が必須であることは誰だってわかるんですけど、そんな悠長なことをする気は全然ない。安倍さんは株価が改憲まで持てばそれでいいんです。その後は株価なんてどうなろうと知ったことではない。この国は今、ある種の独裁政権を目指しているわけですから。アメリカの信頼も、財界からの支持も、あるいはナショナリストのネトウヨからの支持であっても、とにかく改憲まで何とかだましてつなぐ。あと二年ぐらい政権が持てば、自分の望みはすべて叶う、その後はもう日本経済がどうなろうと、日米関係がどうなろうともう知ったことじゃない。安倍さんはそう考えている。

戦争は平和で、平和は戦争である——これはかつてアウシュビッツに掲げられていた”Arbeit tmacht frei 労働は人を自由にする)”という有名な看板を彷彿とさせます。私はこの実物を見て、ユダヤ人を大量虐殺している強制収容所で、「労働は人を自由にする」と掲げられていることに強烈な違和感を覚えました。安倍さんの言語についても同じように感じます。

内田 とにかく安倍さんとか橋下さんが難敵なのは、ロジカルに論破することができないということですね。彼らは誰も全然議論する気がないわけですから。議論というのは、それぞれの論をテーブルの上に出して、それぞれの論の破綻している部分、脆弱な部分を点検して、どちらがそれでもより「まし」であるかを、二つ

の論の中程に「落としどころ」があるかどうか探る場合にのみ生産的なものになるわけであって、その前提には、相手の論理的誠実さについての信認がなければならない。嘘をついても、データをごまかしても、前後に言うことに矛盾があっても、とにかく相手を黙らせれば「勝った」と思っているような相手とは議論にならない。この二人は異論と対話する気がない点ではほんとうによく似ています。安倍さんは国会の答弁でさえほとんど答える気がないですね。

内田 戦争が始まれば「こっちのもの」だと思っているからでしょう。でも、戦争ができるような仕組みを作るためには、「これは戦争ができるための仕組みです」と公言するわけにはゆかない。「これは平和のための仕組みです」と言い続けて、法案が通ってしまえば、もう「こっちのもの」だと考えているのでしょうか。実際にそうですから。ですから、**法案が通って、「戦争ができる国」になったら、安倍さんはすぐ戦争を始めますよ。**これは予言できる。だって、いったん戦争が始まってしまえば、もう誰も戦争に反対できませんから。政府批判したら、そこらじゅうから「非国民」という罵声が飛んでくる。局地的でも戦闘に勝てば手柄ですし、負けたら負けたで「おまえらのような非国民が反対するから負けたのだ」というロジックで反政府勢力を黙らせることができる。

福島 安倍さんは第一次内閣のときに、他党の党首がいる前で、お腹がすぐ痛くなるとこぼしたことがありました。その無防備さ加減に驚いた。でも、安倍さんは復活したいと思い、誰かがそれを支援した。

内田 **日本会議**でしょう。

内田 橋下さんもそうだけど、一喝したらそれまで偉そうにしていたジャーナリストたちが一斉に縮み上がったので、ちょっとびっくりしているんじゃないですか。「なんだ、ジャーナリストってこんなに弱いのか。これまで批判勢力にさんざんなことを言われてきたけれど、こいつらこんなに弱虫だったのか。なんだ、びくびくして損したよ」と。日本のメディアの弱腰が安倍さんには成功体験として記憶された。

福島 石原慎太郎さんも似ていますよね。

内田 ある種の反知性主義なんだと思います。知性的な人間は、自信がないこと、根拠がないことについては、ちょっと口ごもったりするけれど、彼らは嘘でも平気で断定する。そうすると聴くほうはこれほど自信たっぷりに言うからには何か自分たちの知らない根拠があるんだろうと、つい気後れしてしまう。

総理大臣には大きな権力があるわけだから、ふつうは断言しないように自制する。でも、**安倍さんは自制しない。**

内田 アメリカに**サンディ・スプリングス**という市があります。以前はジョージア州フルトン郡という行政区分に属していたのですが、そこから独立した。金持ちだけが集まって作った街です。自分たちが払った税金を弱者の医療・教育・行政サービスに使うのはおかしい、自分たちが払った税金は自分たちのための行政サービスに専一的に充当すべきだ、税金を払えないような貧乏人がわれわれの税金にフリーライドするのはアンフェアだ、と。そういう発想をする人たちが街を作った。市職員をどんどん解雇して業務を民間委託した。コストがカットされて税額は激減し、一方で市民たちが求める警察や消防のサービスは手厚くなった。

高額納税者の住むエリアが離脱したので、残ったフルトン郡は一気に税収が減ってしまった。病院も図書館

も閉鎖され、街灯も消えて犯罪が増えて、教育水準は下がり、貧しく、住みにくい地域になった。

でも、こういう貧富の分離を「素晴らしいアイデアだ」と思う人がアメリカにはたくさんいるわけです。なぜ自分たちが払った税金を、貧乏な人間のために使わなくてはいけないのか。貧乏になったのは彼らの自己責任である。われわれは才能があり、努力してこれだけの収入を得ている。才能もなく努力もしない人間がわれわれの税金の恩恵を受けるべきではない。そういう理屈で金持ちだけの市を作ったら、全米から拍手喝采が送られた。そして、「サンディ・スプリングスに学べ」と、次々に金持ちたちだけの自治体を作る運動が広がった。今や三十数市がサンディ・スプリングス・モデルになって独立をはかっているそうです。

福島 アメリカのように、ボランティアが盛んで、寄付金の額を競うような国でもそうなんです。

内田 昔の金持ちは、功成り名遂げた後は貧困層に教育や医療の支援をした。資源の分配を成功者が主導した。でも、今は違います。富裕層はさらに富裕になるために努力する。だから、貧富の格差がすさまじい勢いで拡大している。

資本主義はもう歴史的に行き詰まっています。世界的にもう経済成長は終わって、ゼロかマイナス成長になっている。だから、この「金持ちのせこさ」は世界的な傾向だと思います。

~~~~~

トリクルダウン理論（トリクルダウンりろん、英: trickle-down effect）とは、「富める者が富めば、貧しい者にも自然に富が滴り落ちる（トリクルダウンする）」とする経済理論または経済思想である。均霑理論（きんてんりろん）とも訳される。サプライサイド経済学における中心的な思想となっている。

~~~~~

家族に必要なのは愛より敬意だと思うから。だっ

て、家族が何を考えているのか、何を感じているのかって、結局わからないわけです。愛するというのは親しみとか共通点を軸にした関係ですけど、敬意というのは「共通しないところ」に対する気づきですからね。

内田 離婚の理由は、飽きられたことだったんです。「あなたは人間としては信頼するに足る人物であるが、男としてはもう飽きた」と言われた。これに対しては「あなたは間違っている」とは言えませんよね。「はあ、そうですか」としか言いようがない。

...

内田 「飽きた」という言葉でどこまで彼女が真実を語っていたのかはわかりませんが、そういえば僕が絶対に立ち直れないくらいダメージを受けることはわかっていたと思います。実際に、がっくりきましたから。それからかもしれませんね、首尾一貫することとか、裏も表もないことには、あまり意味がないんじゃないかと思出したのは。そんなふうに気張っても、女の人に「つまらない男ね」って言われたらそれっきりじゃないですか。

内田 国会議員の萎縮も問題ですが、国会そのものの存在意義が失われつつあることが問題だと思う。最大の問題は、法案提出前に安倍総理がアメリカの議会で「夏までには法案を成立させます」と約束してしまったことです。安倍さんは行政の長ですから、法を執行する人間であって、法を制定する人間ではない。立法者

でないにもかかわらず、まだ国会に上程してもいない法案の制定を約束してしまった。あたかも自分が法の制定者であるかのような発言をした。これは**三権分立・主権在民への挑戦**です。

内由 「**論言(りんげん)汗のごとし**」と言いますけれど、本来であれば、一度口にしたことはそのあと人間を拘束する。

それが人倫の基礎だと思うんです。**みんなが平気で前言を翻し続けていたら、人間社会は成り立ちませんよ。**特に頹廃を感じるのは、平然と約束を破り、嘘をつく人たちが、そういうことをしても処罰されないという事実そのものを彼らの権力の確かさの証拠として誇示していることです。一度権力の座についた人間は「どれほどルール違反をしても罰されない」ということを、彼らは彼らの言動を通じて日々アナウンスしている。

権力というのは、ただ権力があるというだけでは機能しないんです。**理不尽な行動をしても誰もそれを制したり処罰したりすることができないという事実によって初めて人々は「この人は権力者だ」と理解する。**アメリカのオバマ大統領と北朝鮮の金正恩では政治的実力でいったら圧倒的にオバマのほうが上なんですけれど、彼はルールに従って行動することを制度的に強制されている。でも、金正恩は彼を縛るルールを持たない。だから、どちらがより「権力的」といったら、これは圧倒的に金正恩のほうがなんです。理不尽なことをしても罰されない人間のことを「権力者」と呼ぶ。その意味では、安倍さんは戦後の総理大臣のなかで最も「権力的」だと言うことができるでしょう。

福島 今回の集団的自衛権の行使は、安倍総理の対米従属と外務省の大国願望の合作だと思います。あとは経団連の金儲け欲望です。日本は軍産複合体が支配する**プチアメリカ帝国**として金儲けをしてゆく。

内田 **プチアメリカ帝国**というよりアメリカの「下請け」ですよ。**もう経済成長しそうにないので、こうなったらと戦争特需を狙っている。**そのとき、銃後で金儲けだけするのもいささか外聞が悪いので、日本からも兵を出して、死傷者を出しましょう、と。そういうことなんじゃないですか。一度自衛隊員が死んで「英霊」になってもらえたら、あとは一気呵成ですから。「彼らの死を無駄にするのか」と洞喝すれば、いくらでも戦争を継続し、拡大できる。ひとりでも戦死者が出れば、もはや戦争の大義が問われることはない。「死んだ兵士を犬死させる気か」という常套句で、非戦論・反戦論をつぶして戦争になだれ込んでゆくつもりでしょう。

福島 たしかに株価は上がっているかもしれませんが、塩崎恭久厚生労働大臣が、厚生年金積立金三〇兆円の半分の六五兆円を株に投資しましたし、政府が売った国債を日銀が買いました。私立学校教職員共済年金、国家公務員共済年金、地方公務員共済年金なども、今まで一株も持っていなかったのに、株に投資しました。また、厚生年金積立金と統合しました。**ここまでやれば株価は上がる**でしょう。

福島 「**今だけ、金だけ、自分だけ**」というのは若者の気質だと言われますが、これはオヤジたちの気質です。

内田 そういう人たちが日本社会の指導層を形成している。

内田 今の日本社会では、能力は横並びですから、最後の決め手はイエスマンシップなんです。どこでもイエスマンばかりですよ。効率よく動いている組織はそうなります。多士済々のほうが組織としては面白いし、可能性もあるけれども、短期的には効率的ではないんですよ。イエスマンばかりで、全部トップダウンで物事が決まるほうが、効率的に動いているように見えます。

株式会社というのは、投資家からお金を集めて、儲け話にどかんと注ぎ込んで、リターンを期待するという仕組みで、もともとは一回だけの事業に出資者が集まった。うまくゆけば儲かるが、下手をすると丸損という賭博的な性質のもので、だからこそ、株式会社は発祥の地であるイギリスでも、何度も法律で禁止された。人倫を害するという理由で禁止されたのです。現に、組織として持続することも、従業員の生活を保証することも、株式会社の目的には含まれていません。

だから、国家や自治体を株式会社モデルに基づいて制度改革することはナンセンスだし、危険なことなんです。そんなことをしたら、共同体の持続のための制度や、共同体成員の福利のための制度はどんどん「要らない」ということになりますから。

も
う一つは「言葉遣い」です。読者の知性を信頼し、読者の判断力に敬意を持っている人と、読者を侮っている人では、言葉遣いが変わってきます。読者を侮っている人は言葉遣いが「乱暴」になります。論拠を示さない、定型句を繰り返す、冷笑的、侮蔑的な表現を頻用する。それは彼ら自身が「読者を侮っている書き手」のものしか読んでいないからなのです。その文体に感染してしまっているのです。読者を侮っている書き手（場合によっては自分の読者を嫌っている書き手）のものばかり読んでいる人が知性的・感性的に成熟するということはありません。